遠隔操作システムと文化史教育

芳澤　元*

電子書籍十年のいま

毎日、日記を書く習慣をお持ちの方は、どれだけいるのだろうか。今どきは手書きするよりも、代わりにSNSに投稿・公開という方が時勢なのかもしれない。私自身は、小学生のころ、毎日つけて毎週提出することがクラスの宿題だった。毎日だから、かなりの負担に感じたが、数百年前の日記や古記録を読む際に、〝書く側〟に対する歴史的想像力を鍛える役にも立っている気もしている。

その後、自分では二〇〇〇年から手帖に短い日記をつけ始め、翌年ころからパソコンにノートを作り、以来、日録として入力してきた。最近ではそこまでの余裕はとてもなく、思いついた際に、教育や研究に関するアイデアの簡単な備忘録と化している。

さて、本学科紀要第三〇号記念ということで、随筆のネタに困って、芳澤日記のデータを開いてみた。しばし通覧したところ、二〇一一年一月五日（水）の日記には、以下のように記していた。

昨年（二〇一〇年）から米国アップル社のiPadによる電子書籍の普及がめざましい。とくに二〇〇〇年以降、有料メディアとして小説・雑誌類・コミックス・写真集などが登場している。指先で画面のパネルをタッチするだけでページをめくり、紙媒体では不可能だった動画・音声・ネット検索や複数文書のリンクまで操作できる優れものだ。二〇一一年は「電子書籍元年」だという業界の声もあるようだが、書籍の電子化は、おそらくこれから漸次進んでいくことだろう。

年末の大掃除が捗らず、いまだ書斎にプリントや論文コピーなどを散乱させている身としては、本棚の整理を楽にできる電子書籍のありがたさを感ぜずにはいられない。

こうした電子書籍の動きからすれば、学界においても「論文の電子化」の議論が加速してくるだろう。すでに紙媒体の論文がPDFファイルとなって配信されることはあるが、iPadのような諸機能と組み合わせた論文発表というのは、まだ行われていないのが現況だろう。ひとつの論文を発信していくうえで、今後、多彩な視聴覚コンテンツを有効活用することに、大きな可能性はあると思う。

歴史学の場合、歴史事象を復元して具体的に説明しようとするとき、ただ文章を書き連ねるだけでは、言葉の綾もあり、細部をごまかしかねない側面があるだろう。文字情報だけでは、一般読者に伝わりきらない部分もあるのではないか。

もとより他者への披露は意図していないから、思いつきばかりで統一性のない気やすい文章である。携帯電話を持つようになったのが二〇〇〇年で、同世代に比べれば遅い方だったが、それから十年の歳月の移ろいとデジタルメディアの長足の発展に、驚きと可能性と懐疑とを、自分なりに感じての筆録だったかと思う。

日本文化の過去・現在・未来　遠隔操作システムと文化史教育　芳澤　元＊日本文化学科　准教授

この「電子書籍元年」からさらに十年が経過した現在、covid-19流行を機に、オンライン講義が奨励され、電子化普及のスピードは否応なく増した。

半ば強制的にオンライン機器に向き合うなかで、将来の教育・研究活動のあり方を考えない者はいないだろう。アナログとデジタルに加え、対面と非対面という想定外の選択肢を前にして、両様の教育方法をいかに確保し、工夫していくべきか――。ここから先に述べることは、現場リポートにもとづく個人的な妄談臆解に属する。

私のオンライン講義挑戦

オンラインの非対面授業を求められるという突然の事態を前にして、私の場合、配布資料などはＰＤＦファイルに変換し、本学の学習管理システム「明星ＬＭＳ」を用いて、資料の配信時刻を設定し、授業中の所定時刻に自動配信する方法を採った。同時に、講義中は遠隔操作システム「Zoom」にパワーポイントを受講者と画面共有して映写した。これらの併用によって非対面授業を進めた。

担当する「歴史文化論」「日本宗教文化論」では、着任以来、パワポを多用するようになった。この手の機種は不得手だったため、当初は毎週の準備で徹夜する日もあった。

そのおかげか、オンライン講義に切り替わってからも、さほど苦労することなく対応することはできた。かねてより、「日本人のプレゼンはパワポ依存だ」との批判もあるそうだが、少なくとも、事前に録画した音声や画像をただ垂れ流すだけの授業はせずに済んだ。

また、これはオンライン以前からの〝実験〟なのだが、中世の日記や古記録に記された、さまざまな文化的な場を、わかりやすくするためイラストで再現し、パワポで図説する回を設けている。

これまでに、①奈良興福寺で上演された「戒賢与外道論義」での動物ものまね芸、②美濃守護代の斎藤氏が城下の禅僧十一人を招いて饅頭を馳走した館の光景などを扱った。パワポのアニメーション機能で画像を操作し、歴史空間の再現を試みている。

このうち、①は、将軍足利義教が興福寺に参詣した際、寺僧が演者となり、三蔵法師の師である戒賢と外道（悪魔）の、神通力合戦を演じた舞台である（『室町殿御翫延年等日記』永享元年〔一四二九〕九月二十九日）。その対決では、両者が超能力で動物を召喚し、戒賢の鶏・鷹・猫が、外道の召喚した百足・兎・鼠にそれぞれ勝利するという筋立て。『十二類合戦』などの図像を用いて再現してみると、学生のひとりから「ポケモンみたいな芝居ですね」という感想をもらった。

また、②のイメージ図は、芳澤編『室町文化の座標軸』（勉誠出版、二〇二一年、一四頁）にも掲載したものだが、授業のパワポでは、四コマ漫画風のアニメーションにした。画像をふんだんに使う私の傾向から、毎回のパワポは、どれも一万キロバイトを越える。だが、ビジュアル化することで、話を噛み砕いて学生に理解を促し、パワポに組むことで、オンライン授業でも平時と同じように操作することができた。

室町をマンガで描け!?

さらに、一歩ふみこんだ実験も試している。今年度は、③室町時代に現われた〝七福神盗賊〟に関する史料、『大乗院寺社雑事記』文明十五年（一四八三）六月二日条をとりあげた。この史料によると、福神の装いをした女房十六・七人が、新興都市である和泉国の堺を抜け出して京都の上京に入り、京都からは、貧法神（貧乏神）の姿をした男五・六十

人が、頭上に鶯やニワトリを頂いて堺に向かったという。ハロウィンに親しむ世代には、少しはとっつきやすい話だったようだ。

学生が安心したのもつかの間、この史料の訓読と大意を学生に読み聞かせ、その内容を図説させる課題を与えた。受講生は七十名ほど。課題を提出するには、福神の装いや貧乏神の特徴、持ち物、配置など、思いもよらないことまで調べ、考え至らなければならない。

一見、無理難題にも思われそうな課題に、どう答えてくれるのか。Zoom越しに苦悶する学生の顔も見えたので、緊張を解きほぐそうと、「絵をうまく描く課題ではないから！」とフォローした。結果は、色鉛筆で手描きしたり、iPadのイラスト機能を駆使したりと、予想以上の力作に恵まれた。

これら文字情報の絵画化、いわば〝史料の絵解き〟の試みには、一定の合理的な意図も込めている。十年前の日記では、「言葉の綾によるごまかし」を気にしていたが、今回は人物の並び、髪型、服装や食物の色・形状、建物の構造など、文字情報だけでは伝達しきれない情景に対する歴史的想像力を促すねらいがあった。このような課題に取り組むことで、見逃しそうな歴史空間の〝細部〟に思いを致し、歴史事象に対する洞察力の涵養を期待してみたわけだ。

むろん、この作業は、文献の精確な〝読み解き〟が大前提となる。ここを一歩間違えれば、いくら〝絵解き〟がうまかろうと、肝心な部分でスットンキョウな歴史誤認をしでかすことになる。逆にいえば〝絵解き〟の試みが、かえってそうした誤読に気づくキッカケにもなるだろう。堅実な読解力と、柔軟な発想力。これに電子機器の技術が加われば、さまざまな可能性が開くのではないか。誤解を恐れず思いきっていえば、「論文の電子化」と共に、いわば「論文をマンガで書く(!)」という、新たな歴史叙述の糸口になりうるかもしれない。

オンライン講義の壁

とはいえ、完全オンライン型の講義には、越えがたい壁があると痛感する。本学科一年生の必修科目「日本文化体験」のオンライン講義は、かなり苦心した。この講義は、百人一首競技かるた、茶道、能楽、落語、講談、坐禅などプロの講師をゲストに招き、身体と感性を働かせ、体験する学習を旨としている。しかし、完全非対面だった二〇二〇年度には、飲食を必然とする茶道体験を、例年のまま進行することは不可能だった。能楽体験をZoomで生中継した際には、通信機器経由だったため、せっかくの笛の音色がノイズになってしまった。毎回、ゲスト講師の方々とは知恵をしぼった。さいわい今年度は、本講義は対面型となり、かるたと喫茶を除いた体験は、辛うじて提供することができた。

体験学習を非対面や諸制限の下で計画する際には、こうした多くの障壁を乗り越えなければならない。オンラインの手軽さへと安易に流れることへの危うさなど、この二年でさまざまな感触を得た。オンラインの至便さと共に、対面ならではの手触りの重みを再認識できれば、教職員も学生も、授業への向き合い方を捉えなおす好機にできないだろうか。

「便利は不便の、不便は便利の始まり」。あいかわらず明窓浄机から程遠い書斎を大掃除していると、そのように思いたくなる。